大成會席

勢語原

後編 二

へ遠13
1707
7

黄相新
伊勢傳

二席

周社易牙料理ハ古法
天下の人其味塩梅を賞美
すれども亦志ふべし麺向話
異ふりをいへども椀中の味ハ
ものく其義味ハ成うしなふ
変まく多しされど素人口あり
辨くもちひるおうし一遍ぞん

へ 13
1707
7

夜食口誹くちまを叶ふ
貝焼乃風味を面一流乃
好ふを味なる事よや
今や去帝もかさたまし
中よ味献立の寡味佳着
いづまを何を料理分
らぬ田舎口彼をたまま芸
ゆゞたふ山ゝだも栗を

味のあふ少ちあれ甲
乙のを称ぜし諾好士ゆる
弱へうしとたうゝ

貴久乎
ませ綿身
朝日

増舎大梁

噺會四席目

順會咄嗟立美志

増舎大梁撰

美頭
紫ト筮　桃太郎　李蘭
第二
女丸正直　如風　歩兵で雨桂馬　耳亮
第五
安倍仲麿　如楠　くくると顔　左又
第七
牛ガ蒙古　二弓　鮫の美名　人法
第九
後のしろこ　亡姜　瓜ころころ　姓

紫ト筮

ゑまセう。法京さ夕因方よぶざりまそるうアイ　何ぞ
おのぎみ方ゑ。バイ　私い後せゲ　ゑりまをめ。本性でよ
ざりまそすゲ。何ぞ性よ合まゑるのを考てゆさりま
せ。ナルホド心ゆまし。たゑえの本い焼石京の枕の
本ゑれバ。コヨッ　水生本の心で。ゑつよ高麗ゲよい
ゲ。ゑつよ枕。ヨシ〳〵　造泥屋をゑされ。ゑ後海ゑ
ぶざれども。大分えゑゲ入まそう。私ゲ屋こいぶぞいぶん
ゑ。後のゲ　斗いりまそるゲよ。ぶざ。ムウ　ゑれば

板桶でゐ汲をおされ、まゝ八カもあり、小藏て汲は立
まゝぬなんでゐ汲桶のうえゝで汲屋紙もよけの出来ま
さるを考て下さりませ。有る紙屋八ゐ方をゝでおざる
どれく考てをゝ。板をゝ宗工右衛門がおざゐ
ソレハなんでおざりまれ。うれ。出ッ生鯨を又合羽屋八
てそれで鯨を泊よめしゝ屋を

五代目八五代

サア息おしく淺八戻りくと、又出ん七あ。汲
でも天ゝで又せるのゝと見よ這入ゞ板塀ゞんをのゞや

子口ちのじやが。てア法性寺の八道へあんでもあいろは
い忘れもせずと後者。子宝丸もタツタ一息なんでを
勢うち見ていさが。唄とと息つぐじやと唄の最中。後よ
正直者ゲ笑て居てまえが知の孫ちよいす。むヒうも
つ忘り器の息サエ

女子の正直

生玉の占ひの居ま。七ツ目の山寺ちうと書付をさて。
サ七八の女中下女を連おたのこりませう。七ツ目の寺
下さりませ。ハイ。おとうハあ。アイ。ヒのそーでおざりまして。

ハイさあうあら。是をばいげませう。イヤ十一月をおくれな
され。ハイまでおゆりまをあが。たうおざりませあ。
トハな。アイ家内のそのとをが。エて左板あち

歩兵で取桂馬

進南と見て青銅の銅を入おあうだんはとうと行下児
が。檜のうへ人張り。伺ちんと見る所カノ着を表ようう
ちでと様子の上ようを。一公ふ丸ちめ入ハ川ち銅弁ちて。
大ら者へ方込む銅の器し下児が見とる工合ちうく
ぶんの銅がぞでんどう。銅引上て二拍中ちハ長ハ孫ちハ

川へおちて鯛がかゝりしと。弟子が申す。丁稚ハ川ばたへ
たりかゝり。其鯛ハ只今私が拾上て落したのでござり
ますれば。其ハ拾ひ返して下さりませ。イヤ〳〵一ツさん網でとられたれバ
河をとる事ハ叶わぬ。其ハ去る。ハーエ〳〵までハ私が足踏入るよ河
ません。ハテ進ぜましやう。あれハ先へ御さきと去でござる。イエ〳〵
私が居て下さりませと網をかゞして投ましよ。ヨイ〳〵ハ
然らバおぎ〳〵して其口とて紙二まい銭三十。是持て去ね

安倍仲麿

サア一ツお上り。あがれ。てア其心の合さつは古事の合。さあ
月の出汐を見てハ何でも浮瀬のうすじやおやおや。イヤ〳〵
家の貝の盃からまだまだ、そんなハ広沢の池の月影どもも見え
さうなものじや。イヤ私ハ文科へ田舎から出る月を見ん
まするほどさ。イヤ文字割でおざりますそしてハ傍へ
其や文峨眉山の月ハ一向とんと沢の遠ざとのとやうな所
沖はく楽のおし。其峨眉山とやハアノ。唐詩選の
詩よりなる山でハござらぬか。ハテ云ふとても唐の事ゆゑへ
ハあんまりじや。シテ其云ふ文をべらり此境じことおぶ
そかくまい。ハイ紅毛の説で

くゝ子と亀

浦島刹那の人が逝所へ尋ねて今帰る
一旦かくりませうと取出し子ども浦
島刹を一二旦もかくりれば家内いりてあはしや
さいて蒸れ出れば中ぞうちをけてかいて番
をぢだよ下駄ぐゝ一心不乱に喰入る。
左支がコリヤ去吉よ。爺様や婆のさまれ
ものうきくてひふぢ仕て来るとかくの如
あふとかさむ中ちうあげかるまた

同をものてすゝくと。おさ出を枝にやあてらと行も洞をあげ。巣こうふしてなんとおとれ者ゝ
イヽエおおの所じゃ所が巳が森所じゃ

牛が賣をめ

去る後人武をするもとも。哈て仕業のためよる仕を
よせて負の指南。子の悪事も生人せびよりきぶし
なをさせんものと。まを樂しと者る武士仕者
と見て。歴くれ武士るとまて仕事も著くあきら
びやうよりる。悪れいうしろみうるほとよん

送り者れば。親兄を見て。悪れも。河のやう女武士よ
ふへう。悪れアイ。親やうくびぶん親よりくるる
とあん侍よ。るとも。悪れ〻アれんやおすの人も。
不孝よりのこの

なぜの吳名

いとやんぐこの兄の後家。うりく家むりしげよ
おうりの人の別家出人の者た。アレでは病気よ離
ぶう悪女房の巳役た。孫の外おり後とそめて。
芝居を見ぶ。人口をいとひのまうりのそぶせうよ

せうと別邸の庇云合行ぐあおあをあぐさめんとぜ夏
させぐ孫のみよ泊まるまるげか。チト　おあだしとと鬼
やけまべ実まへよ四つとと東婦の寺に屋（彩遠の大市
元ひへ分出入の看屋ぐ長所舟をたいーあるよ付う。
姫別家の内家も行まぜう日和おまんりくること
いこひさこーいこひさとくるよ後家市も立出くを
ぐーぐよ立ひざを金剛の舟ぐ足せあうとそだの人
くハアーとおりひ家ぐーも先方あく足合をわふし。
むふの舟ぐうるを泊ッとくとふあるよチャウト　稚を

後のーー泊ーー
京都よ名ある元庵画工大雅堂九霞山人絵よ妙を
以て和泉の古地山水を写ーー古今の妙を尽しよ画
法を学ぶ為めりて色ーー通の辻よりり紀州地
の京色を見度ーーぎくよ見るすぐ元古日本の京色画
画よ泊くと手番ーーたまべ。イデヤまるすりめいど。茨泉
のめづらしき古地を画学よ歩さんと思ーーも風雅の人へ
かくべ。先づ三遠川の夕雪ーー吹寒く柳の風景おもし
泊ーしくとまるり級の山の山水いりろこの九鉢山もか

うとおもしろく見うつりがんぐく地獄の地も見せいざや
極楽へ見まうんばしかうんと道をたづねて行極楽の
さんとおがーこれかへ出るとたちや美番こんどうまう遍
よ見物横川迷りいくへもまだ面くゝ若尼し美たくゝたる
ゑーこの光り実あるこれ極楽の来門あんとゆメーよ西
さん弥陀さんあよ数百軒の高人居様をあこべ猫や
極楽のまんなかこゝ京の大家大坂の侍堂の前も堂
紀ようあるまんとゆされあがーゝ波家くゝ立りてんれば
を奴ものこゝび皆稽古屋

流ゝひ
或親仁大坂へ笑ゆよ出て浮さ風呂義色ようがけ懐色て
堤ばきこひよ浴るよ洗ーもその風大げ色くだりてう笑よ
ゆさはけるふ風よ旅くかさの級ゆるみ志ゆどゆあるをも
もうをほしく其候歩めーこの打ゑむ縫かさげて
あるく人の色ゞ見さいこと見へ。コレ毛心おゞゝ山かさのひも。
ちりと志あて作されと教しーゞ。若い男あぢの新を志ゞ
わ懐迄て人を教ゝとゆあるゝんとゝて柳ようあゝび白さ
ゝーゞ親仁見色りぬゝぬ新でテモふ性志ありの

噺會四席目

頌會喘蚊豆巻二

増舎大梁撰

十巻　久夫の裾分　叡
十二　拖助上人　笹屋
十三　直抄遠　人徳
十四　蟹どの　桃太郎
十六　はめふり永　福谷
十七　春の長梅　袁里
十八　ちりとの道連　柳翠
十九　長門長滝　亡花
紙　莫　丸礎
亡軸　湯気遠ひ　笠宿水

久夫の裾分

をんなをとこなる男、ひるふときゝ線香よ火のたいさうをもち、おうひのお姫よもと、板ゝ火で猫（あくとをれば、
をもちゝ姫のをうけ、ゝぬとしりよ、むちゝ、くりのふたゝへ、
王さ夏の火で面ゝへとい、バテ是智なむうしゝ蛇
四の火でさゝ

拖行上人

百姓ゝ、ぷんの正さゝの。和泉路より用のゆのて大坂
来ふ道く、大坂よい拖助さゝ出ゝなされて血縁と

ゆ〜下さるといふを出、ヤコリヤよい次第ドヤ何でも茅ふ
ていまと、長町へ遠入くだ、男ばかりぐ過ぐ〜清水へ来て刀ん
きべ門内の新集を刀て、宮なるべーと大江屋の茶屋へ
あがり、咲玄の中入よ法玄の播磨屋へ行て居ふとい志ぐだ
う行く〜して居ふ西へ長沢ゆんぐ〜ときどあさもモワ
ぎぐりますろといふ者。彼百姓女を出、まれば、彼播磨屋
きまふ女よ入ふ。彼男もおーいさぐ丸長沢の新佐ぐ
とおちりハ〜拾ひ多へ坊さ多ふと者へ
直ち違へ

清水辺の大寒気にて。此のあまり寒き中にとの好み
小息子二人とは合点。何といふ席ハもてんやなんが。チト
流してみやと嘘をおりしをお聞かけの噂やくと
咄かけあれバ。彼二人は此辺の素人ともなうん。此の種
にもおそふなもんと同へんより何と此内家。三年後席
を出て来さ由。相合せがあれ三日の打切で置れますると
団へバ。人がるもよくあとも行べしとて。お相手迎ました。
サア二階へ出よといふ。三人の素女に頼てよいとの達じや
おまへハ何ちゝか。私しや語りてあわせてしやのがよい私

ハ初手のがよいぞふ。挨拶おもふよふに行バよいがと。二階へお
がり。されバ。三人にハ安イとの達じや

解　どの

解猿。猿がしまへ行迄て。石切が居てかまどのく何所へ
行ても。猿がきまへ出さ私るにきまするる。お猿さまのハ
何でござる。日本一のきびだんで。つツやされ此節中そふどふ
にむしてきりなれバ。はまれて見てボウイ。忍立ききあ。何ぞ
よひとの気とありたらバ。おまへが尻をお猿さのじや

佐　やふかみ

山出帰りより来さ飯こさ女子のさりとあるぞいな
ごさらく身ぶんぶ小利口は良ものと義のよ代へ
れすあらうをおぎるいろ〳〵あぶ中よ久こぶ赤
ちんでわもいらべと分ぶよさ首尾もなくあせん
かくやと。福よならぬ計おの必ら所わ義中戸宮
てめ合ーよ人月なけもべよさわと尻をフゥーリつ
めりしよ下ちをを立ちさめのそおおの人いあそしん
あさぶとこあうさめ新ぶこめんぶくなくも新あかあ
ハイ〳〵ハ立年でぶんそ

春の宵梅

月見い母のよーじや放生会も今夜の母うお日和
もさく来とこ三十石のちり宗合イヤ来こさ女い行
方でぶりまん。ハイ京都でぶりまも。ア一月和
都の東山ひろさと紀のりかとあーかぬるでお
ぶりまん。イヤ大坂も又山陽の岬網ぶ夜ひつくり弦
又仮寝の新年八月の焼立おとくかて来さぶの子へでぶる。
イヤ弁い出ハ行方ぶやお。宵さい奥州ぶ。西ちく
色ハ来りやもぶ月ハ出元のよさ。日梅さんまハまハ西

くて物まれなんぐ。お月さまい大きさ元亀の方で見て在
祝ぢむいておぐみゃをサ。がぐ〳〵のんぐ泊りくでお月
さまをおぐむ度ぐよとんぐさるまいおサク祝ヤをぐ
九月〳〵まるのさま月いおくさ皆よ参るべ

赤のとれ道連

清姫大蛇ちんぐ。おちんを赤さい日さるの里を赤泊ぐ。追
泊道よ連の山中〳〵入口ーぐ大蛇よめ合ーと合長ゆ
うぐ赤をかゆゃーおまゑいぐ参ーどゃ。イヤうぐうぐまう
ぐうの乙姫浦ーまを命とかさらへーぐ。私ーを赤さ去

ふーて行ぐさ赤をめ抽張そんあう私も仙さ参うあるの
姫ぐを相はいぐ泊ゆよ連立て丈の泊を赤さうんと
泊んをそれど乃赤をぐ。見いどふ赤うあよーゆうと二人
の大蛇ハ石東のさあるさ。ぐさゆうザハ〳〵赤るるゆ則見
ぐ道却〳〵と清姫西カんとる。乙蛇ハそぐゃ。さ仙一の塔
うぐぐさ方を道赤ゑ〳〵と入ユ。ハテ蛇の乃ハ面びーゃ

長門戸花

板ハ〳〵と〳〵ハ今年り病ひぐよ全年る見ゑそーぐゃ。ユ
月ハ三日坊と〳〵参うハ河花年まひぐ年ぐ白陸分用

むすこがよめひとり家内が増して居ける所へ其のごろ長兵衛よりむこいりの聟なる坊主が門を通ると近所よりおびてあさくんでも波三日坊主と云へば坊主のやうだやと届遠帰るとすぐ家内打寄て茶番と琵琶ひいておもしろいおうとふけおばはまちあり病ひをのがれるほど琴をといふものや茶番で弾して見るとおく此はりの聟の弟サ七人八才今やつら坊主じやあるめへるのだやと家内の曰く　隠居親仁おくがら是を聞て　コリヤ何じやさしぬがるイヤその弟が聟なりよしませよ

紙　兵

何がな漢本を参さがる儒者門弟大勢の名を屋町を歩あるに数多の名を見て先生いづれも出来されし是をおもふまも仲真の廣太なるが此ありつるとやとの見て元来此にがれ渡る者のでござる先翁でもコレ京あやむ廣丸ちやおずるも小名も太でさ廣太の名でおざる　門人イヤ先生さあり許にも作るとまうさな都代のにも鶺鴒本で妹背の名をおく又常世の長喃鳥岩戸かくれは事を告ぐとおされば鷄も小名も日本

屋敷ゝり行ると見へまんと思へ出ギツリ法まりあぐら
おせらるゝきびたれておぐ侍候日なよ行る者あゝ大ぐさ
生涯てうなおぐろ

切気ち　八

文肩おあ親をあるぐりおあ遊といの合色素濃桃賀吉よ
めとさや・おを愛習似合る家周あるいの輝云ゝ考おを
滝港よおる身の考ふるちの見ると・ち海見下の故八屋
浮ゝやの・イヤ矢喋ゝやのと行ゝ考きあるの云八を美八
賞ゝ法合ゝも親ゝ家周の考ふる拒石ちとゝ

考ゝ八いゝり八ゝ成世おそこの面ちよ彼友遊ちゝりは
面ちでおぐりまんゝ考ゝ考ゝ考ゝ八ゝ考ゝ考ゝ考ゝ八ゝ考ゝ考ゝ
者横へのりまんと作ちを下ちりまをとの亜出る行
考ゝ臭ちよ家周の考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ
今お出考れ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ
さと考あ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ
まん・チョワト世てさんゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ
母親ちかゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ
チョコ〳〵候拾て候ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝ

巻二終

噺始末四席目

順會噺始末巻之三

増舎大梁撰

天竺浪人	朱楊	と関	松戸
鮫の鑒	十人	里の大きあ	人法
現世未来	可雄	あてちごの	炭林堂
大きりとの	丹丘	子合点	竹
色恋柔湯	拙亭	大胃わて蟹	耳彦

天竺浪人

けるかゝ一番んかゝりゆ仲る。ふとゝ申して居ても来れわ
きびどや・シテ又れハひとん名ハ〜ぞ・ハて高さぞ・サレバ
ちとんぢんぢんぢて有り御ろ。さよ・ほいかてぐ〜さんて〜ま
人ハハけ有り力せすのでハ人よ恥をき〜ま〜るよどや・いま
さ〜のぐりとふてもものぐ〜ま。ハテ　おきとハ人ぞやしと
るよどや・けあ一ん・でのさ有り・ぬよ・ぬせのあぐ〜でのぐ〜
ま一んとハふとハ一ん・ぬわ〜〜〜ん・ナニノこのぐ〜ハ様ハの
ろ・サア法ぞぐりてのぐ法・イヤまぐさのぐ〜ま。

そつて、いつ、石垣の底へ左殺を出し、

堰と関

あのもの三三人連でまゝの猪負分をのちくさと、
笠ケ浦、茅川いとゑじや、すウハ谷風いたよ奈のじゃ
と、法利とりぐ、戸ゐりゐるが、田舎道者と茅
ゐたもの中ゑく下の関へいざうでぎらりまゝ
ヨヽイ出ゑ川い、猪でぎん也

和泉の盗

又、ぎんのなん指茅ハ行つてあると、この内でぎん也

く。三尺手拭(てぬぐい)へ帯たなぎ合して。松の枝にかけ
かくればおまへいやかいのちよコレ　イナ清七さんつれ死のんかハナ。
それ死ぬにモウ。夜が明てはおそい。サアそこを早く男の
魂(たましひ)と松の木にあがりかり見渡(みわた)せどもわさがとみまてなん
まり見へず。まく　主よし言へちらの夫月空かり出て覗(のぞい)て
見れバ。檀天(でん)満へあせ道(みち)をでダがらぐく。アヽコレハ嬉(うれ)の
的ぬと気をいらてバ。下から　おまえがコレ　イナ。清七さん死ん
じなア。サア死ぬでも死なさん。ソレハなぜにエ。サモウ
檀天にみえ付きまして

里のおやり抱

弁財天(べんざいてん)がおつまりそうに戎(えびす)どのへ言へ来り　余儀(よぎ)な
きさいふ今の人間の欲くの商がさりに戎もあまり外の
福人達(ふくじんたち)のまゝへ女子のあるさに金の合力しよと沙汰(さた)
有てハとの事りゆとも。サスガ云わせぬ才人(さいじん)への弁天。
サア　そこハ外へとその内証(ないしやう)よして居るでおまへと私(そ)が心と
心でのゝあんでき山度のあんぎをそのひ下されとの訳せ
ん戎もふとんでおまりおかし。続くのゝもとまいゝ
も福おかしまん事外くれ福神へハ恩ぎさしたし家さ

ときに邯鄲(かんたん)ぢやなく合点(がてん)か。ソリヤ　それがいゝやおもしろさうな
おもむきをもそれ分ると詞(ことば)ぢめの文句を出し。備されけ
まへ無天怪ぢやおし　いさうぢや浄土は過(おう)て。山今えより用よ
立ますうとぞいそそくと立帰らふ。弁天の二疋(ひき)のあま狐(よね)
出てくるを見かけて声(こゑ)出して。ナア。ウン

現世未来

あけくれ噂(うはさ)でもしてんで。おさき稲荷の艶福(えんぷく)人と。後生(ごせう)者
まある仁心(じんしん)な人と。二人連で往吉え縁結(えんけい)の下向みち。天下茶
屋あたりでくたびれども。母ごころへくと咄をする。殺人　きつく竹の

中々ありといひまするなんでもかもかでへんてこなすまひ。後生人
イヤイヤあれは中々そいふ詞(ことば)で。加(か)ら出(で)た詞よ二葉(のせ)て繕をきれので
おぶるといふ。殺人　それはあいつよ仕まふ。後生人　これ役(やく)で
ありくぞ。雲介ハイ日本橋(ばし)とて十で引かれよりかでは廃り酒(さつ)
代(て)で出たるといふが。後生人　それは初めとまうけぬに。欲人　これは
まさに流出して寄る気かよ文字の行(ぎやう)棒(ぼう)とまか　出てや
ろぞ。後生人　イヤイヤ念(ねん)気でへ悪。法(ぼう)斗書ものぢや

呰違ひ

マアかねさん笑ておくれ。角兵衛の芳(よし)さんは七八年あとに

なりてさうたのさ三ちあにして切り、井手の手さんこ掃
かんばしを穿ち、指ちをどかりておくまと仮くれで、四さ
く、ちるよさうまりの さ 将来のが所るゆうく ふあくう来
ぎぎ 毒うかゆうえりめ。ひさ八分余りでしの掃う出
ちんよりてアどうせう。おぼんよ来ぐ家の外さんこも。
月場の掃りや、自あだその芝居こ切合のうりが有ぞの
ぞ出ひんしておくまと、ぐれ〳〵なのんざのがたいさ式ちと。
ぼ〳〵して居るひしろこ脇こ帝そのとこて赤ぐ、ぼ帝も熱
足ひうを、バット 鉄ちあぐ〳〵ぼーでもいうちゆまて居ふのこ

時外れの

集所ひ云なの板元ぞ、おぼこてのうく、若文
人森ちがまりて、相箱こ書べ〳〵、雑俳の手番めん
詰俳の手ちどのあうと、少〳〵て、コレ〳〵 ひるにの流やぼ
ぞ出の流、今といふ方さ流ひらくでおう〳〵ぐ仲ひる斗。
ぼく〳〵 元人を方用こあてこぐ、今ひ八さこ多遊も也ぐさの。
サイノ少て下され、近法もでん者家や、病人の他らく
人の家ぐさこだやりでありこ、去きのみそ、ひ、他去ぐ長
まりこ、ちこ、ちこ、ものらぐ、ひ〳〵をぼうまて、あさうたく

こう仕おりまさを

子合点

様がて物知り自慢する家。行商者屋まで懐ろう。
天明流を出し。蘭学者仲居さん相人で毒ろ丸。
の仏頭を見て毒ろ。毒平楽よりかれがんでもおまこ表
らぬこの八間さがよの。おこと東く。おまえ人こ問い後
あるぬすぐ行る。此方も道徳所のお長谷が。長人寄の浮角
どやの。宮編じやのと。嫌おそどやのさが。アリヤ行のよ
どやへ。宮フニ東ろふ様方の。ドヤ。ソリヤ東ロまるあどや

多志の菜の湯

よだりのつとくでのて麻を見て。出家の名号コレハ
数寄屋での出法よ。答もかりほてさ。ハイ。出めはさ
あるたハ茶道を出のを。俳しまで。私ハ出家の。死
よ。別ぬよハ発あるしのむがたのし。今日ハ新たの三多の
志目あまで。不潔法お私がまひ。ぬろやれ
と。妹茶の井戸茶碗よ。ぬろ。雲の答かく。浪しく諸
白のぬがと。出せ。出せば下戸と見。若ハ新て一ト口呑
でまハせば。涙の出ておいしく。泣てたべ

切まんくとおれさん数珠をつゝて経おかしといふも待もやさ
おりハクワイ。丈かと思ふ。イヤ石が飛出てくるおかす
の出来まんかつまとしまりで

お骨折て帰る

今宵ハお客も刀へ手ん。去りかけおんど入りへ入りや。モウ
八ツまでもまことよく寝てゐる所へ来てをさせトしく
喉が耳へ入ぞおささぬじや。コレおきでや、めてたも。コレハ吉
直さ。ハテ。サア。お近へ。おそよ。衣紋をおこしや。テアく
おくへと出たまでも構(きやう)もよへ猫女房(やまよめ)がおくへまいと

通れぞ。ヤレ廊下へ灯をさとせ。厨子の下をかきさぐる。長
吉さん醍醐あきんせ。旦那さんのお伽にでも出来方じや
ノう。大方浮世ぬけりじやハろ。ぼかさんハ宿へ来てさ
よふか寝さあとへまハつて休ませと下雅まで延従ら。
お前ハヨツトまだ娘も居るやら見るもさ。コレお
史。仲居ハ起しや。アイと小女郎が仲居の袖ツぶ寝
あるへ行。おそとんど起さんせ。吉さんが来てじや。仲居目を
まくくるじや。茶入れるは。ヨウ寝入て居るは。吉屋
も吉屋じやちよつと様をまきかしとくれへおきと。細帯の

上へそぐよ第一盃ものでおく（ゑ）ぢ者は何おまっしやいな！
ヨウト家よ居ると吉源うしろ出さべ手く第一びんくらはぎや
と盃を下メよ申けバコリヤおまつのヨリヤ酒い者ゑせん。
ハテひとりおわり者まさんの又ふとこは遠慮なイヤとゑ
いまろう更れぢ者まいはどの者きこ八ゑまり吉源へもさ
よ一まりあしじゃどれく去のて座面へ出て去者くこレ
去者い行ゑ者よ者ハイ家よ森せはて金はて。そう森出
つとうおとりの起したたもアイ去者さんく起キイナ出れ
えんぐ四角ぐあるしゆとり出せべ去者ふせうぐよ何こじや

人ぐよう森て者るものを今出よ出じゃイ。アメけこいの
ゑれト出ぐ出けべ。家内ゑのとうよコレハ去者さんのぐた
じゃ

出秋之三巻終

出秋之三巻仕ル

智恵競咄揃　出秋之三席目　全五冊
新撰新番組　出秋之四席目　全五冊
時勢話細目　出秋之五席目　全五冊
ことば撰新評判　出秋之六席目　全五冊
右七席ことば撰の内二席本題正月二日より本出ーナル

笑之三席目　全五冊完
菊花亭流水撰
少々庵馬宵
撰者高亭瓶吾撰
役者番付の例に不立之の例よりハ役者番付を立て此の甲乙を撰む
順評弥席全五冊

新玄四席月　　増舎大梁撰

順會咄敦立巻四

六十五　おまつ　朱橘
六十六　和勢の風　赤帆　布榮
六十七　佛形気　白桃
六十八　晴の耻　里江
六十九　陰の賠　四十袖　仏法の蔡　馬良
七十　田舎爲　柳翠
七十一　天狗の仕若　吸東
七十二　楚雀
七十三　湯衣　柳翠
七十四　猿作の伯良　白素
七十五　衣　白素
七十六　月食くま方の仕也　茶さりの淺や茶を出
あぶーて　あんぎの示　書てうちん　牝さを　仕かう　ちゃわ
めくらぎ　なんぎでいろ　ソレ　提灯　人せて　出

私しやなくとなて。御良子合点此經讀の是非を
きいてゐるが、家內をどのかため

和尚の墨

花の佛堂なるよと云ふ蛙と。我尚の傍線よも寄さ出家
がらむかしが今よ至まで、沢が点への寺人の高い宗道家じや
が達へアノいんて鸚鵡。求親なとがらせて出いなどくいふ
て世とよ学說が格別じやが、おぬしやおつくへ世るで出家
の田舎をめく。イーヤなまのりがあるので蛙のつくへ天井の中
がるで出来ぬのイヤがつ まあつなく などくいふ遍もアノ

まあんなぞよ坊主が私のよ云てたも殺して出りなれドしく讃をと
三十九わり出せべ。子れめりそならぬいふ娘さんじや。ナアア長者
よきめの。なんや、へ書ても百文錢がとのへある点い。イカニ家の
がさ示じやて。出家 さくるよいふ寺地でもいへくいけへ

佛形気

極楽淨土より。對山先生の佛なりとて。數多の御佛菩薩
うち。對山先生よ赤むらふ光明をえよい大せいを示うしなどる。
さ形でへ我く日席出来がくし。出そり悪すも今ここよ
御家ので、一統の仏のごとく、御釈迦とともわくれど對山

是ハく各出役めらがござれど。何とぞ手形ハ出判捺まして
此奏の役人達も下されわしとやすられねど。役人達めとよそ流
御せか頼ミまじ。ハテ對面致ハ遠慮ある事おさきくへするが。
イヤあるがぢちそふとやるまでもなし。役人達ばへくが酒屋をよ
びよせておしらべさせませう。對山社花盛の時分ぞ祖まをべからず
なかり。誠へ出心射子で

晴の恥

町内の息子に五人寄集まる六将丸の萬会ぞそうさ友ならう
きさ友もらくと隣の門友さちの古ほ屋の息子まで來て。

何じや能ある事か。イヤ〳〵外ハない宴会じや。お手柄も未熟なれバ。
イヤ是がもとで分きぬ。そんな事なんぞハ人のするわざ
そなたの備てこれへとやがて古手の荷をさげ。縮ぢり
めんの襦袢見せ。ヨシ〳〵是をかへ。イヤ〳〵其ハ汗
ぼくにまぜといふをむりに借り。さて是皿と碗より揃へ来る
に致し。何が大事とさらでもすう薬子みなに五人ならひかける嶋
うけ元服しさ、のなきよ参りが来ての大踊。トチテン〳〵ひき
かくれたぐさんの縮ぢりめんハ宮ありとおもひ、大肌ぬぎて
ヤアトサトのへ〳〵。ブレ〳〵と踊人の首筋よ。見てそれがぬく

田舎爺

安堵より息子を大坂へ奉公にはやらしおきさ、宮て成人し
親も見たし娘も嫁入もさせ九人兄弟のあいだ成長なされ内
より小孫がめで、ハイ泣きげんよう成きりまんろ、私も奉公
なされ夫婦も出来、お若いへおかみあやかりの内をはなされ
ジヤリくく チラくくとおい、おや歩き親になりて、アリヤ何の
孫じや、アレハ時計といふて徒然て盆を見なれば、丸つ時
まへ来り来ますんね迄も知れますもパテナ天へ調法
おとのじや、ヨラモ今げる貴ていのたへ、コレ見れて居ました

浅でハ素ものじや去年小判二三百もおるぞやと笑て、おやぢ
びつくりとく忘東しぞんあら ミヤ露銅よ

天狗の使者

勤る山僧正坊より荒山寺お坊へ使者を差す御口上
麻下の木の葉天狗派やしまで、其趣御師待かね候
気へ之をまさき人でなけれど僧正坊太きまいの蔵一度
中出そう小速よ果まづは取返答もなく延引は其の后
ふとでぎの速りと羽音まいま風をおとし白眼付るぞ懸し
枯木の梢の中より当番の天狗の使者の

とうなるもさやさん志やし本の禁仲間のて天狗近年
話れちゆきうよ及びきくとお仕出おつとあい度おとうず
ず一撫つ彼をまきれだめくあくよ変う拾ひおざ谷
く人谷の山上寺はおのるき及ぶ流出を谷うの滝まい
滝びたてまつると涙を落じし孤り行きはめ一ゑを
ゑ家おぶ彼下谷人道よめらるひ糊ふーとふものを
をとこをさりて強きもの人を〳〵考るよるの
尾よてふーゑうものぶ山をとのの谷くもぐけをるの
尾よておゑ長ゑ長きた吸へ寺もぐみ地よあるべきるの尾

を求めゑをとゆ分ゑを本の寺ゑも寺ぐゑく尾寺一ぶ
谷も法刃拾ひまるべーとゆせば。侍ふそれい又ナセミ。バイ私
ぶの口だしでいゆもるの尾ゆゆされません

滝の眺

去ル亦の旦那絵図と宮の滝と滝の男原見物又
来ゑを又の滝ゆ滝をとまびゑゑ人滝ゑて見
眺やをせざるくいゑれられば尾原見を中ゑ夢滝の滝見人
名日を越て又滝ゆ。まよ学年をよろあび。アノ滝へ行
更と名日名れば。世原ゆげのぜんとてゑまへの寺ゑよいと人ゑもの

じやと兄弟さんのおん前でおもてへ出まへの縁でひもぢらあ
とゝおあ・あるとそれへさどくよ気づけそまへて下さのさ
思はらたびの月屋も我もひさろへやんせあんど女房ゆめて
ヲ　笑止

佛法の大者

正直者孫門だのく寺の和尚身持のふらちあるを中
て係よ和尚へ異見せんとて寺へ来あいさろもあくさぐよ
隅室へ出てよ色バ打ち長中会の内分よて和尚調の挽
ものよ離れを咎て長々ぐ涙をゆもあ孫ぢさろん情
よて是ハくくよう仕系涙でおぢるが家門もはをのでおさる
ら。孫門板く和尚のは拾ハ左京よりは遠様でおぢりまも
和尚いうよも昔と遠の人の根元が落よて十万信士へびぐく
祖の。長伴の歩ゲ出あ出。ゆ歩ぐ〜も某冷ておぢる孫つ
左ゆ孫ぐおぢ下厨者よ子遠の三人もあるハ何のあ
ておぢりまん。和尚されだるを持ち孫ぐ歓遠の迴向ま分
味ゲ去ま

巻の二終

大本一冊　表紙ハ一本用孫
年忘彫角力　昌本野山　批本下和　今文冊
立春噺大集　常筆君竹　今文冊
立春新大集　後素野　素堂　今冊
夕涼新狂集　春治軒　素堂後　今文冊

噺会江席月

順會咄舛立矣又

増會大梁撰

四十三 たゞふもの屋　我淨
四十四 交のむし　馬卜
四十二 桂るのる上り　可雄
四十五 泡志命　集有
四十六 物忌　我蝶
四十七 喜入道　る
四十八 撥の花　がう
四十九 秋の光　拾く
五十 庚申　故常
五十一 伯母も伯母　綿車

たゞよ守屋

若後ちる客もはゞ身義八ゆの様と毋うまて氣ゆ逢
方の女良引連てゞしい他正行もよかんいづまてゆ拾ゞんと立
夫おんなの豆業屋も淋しるいりでせんす浮世の真で
西の海面のゆゝ紀を見たしる海者八大蛋
の七合入元又八義涙もよかんと越白辛き元氣よ入のお
こ拾の伊八夫名を山様とゝ　イヤ〳〵見拾さゆ八出毋と
うぬ教色　イヤ〳〵でも人ゝたゞんよとゝむお人がなんしてゝ
毋うよと言〳〵ふしんゞ毋八ハイあの名八入相のひぎゞ拾ひ

算のむー

ゑ徳人の長子ゑ吉の押込めうんきよ借りざし死
ぐらしのかくせいおとこいつとても帝者に面ゐとて外出も
服ゑざ仮ゑ中よも酒屋ゑあこうちの親友達也家
の産業をかりてうり素巴ゑ弐百文指ゑの掛ひのこり
さのさぶこよさんそくさを面ゐ面ゐ所ちもあるを今日ゑつよ
勘ゑうゑ出めゑ紀をゑがけ来ゑ亦ゑ八面ゑ出ゑうんと出ゑ
者ゑ安合がらよ長ゑ酒屋ゑ友ゑ面ゐよ者ゑおゑあ出ゑ出ゑ亦ゑ
あゑゑ酒代ゑ取ゑ仮ゑあげまゑれゑ泥ゑんゑとゑ酒屋ゑ取り

武蔵百姓拾人とりつれ、幸と思ひ楽して花見うかれ、とりてお釣をかく、てア釣石拾人はおかさへ出て、おされ拾人三度又よ後一先の勝負よりのげませう。酒屋りく　てア
まるのてきんぐませふと去れさ法へ於無奈ら、拂の当てよ
渕へ咽をたあらかうよ長のあぐらに浪かくおろしを書せり
さへのりよあさ拂悠ひうとうひてうえ門口を酒屋屋りしかバ
亭主コレ酒屋ちりくとりてよべ。酒や見もさもせどてア
くるてかくのるよ酒ます
桂馬の高とり

モウ三味線あり〳〵。ジタイ芸妓の三味せんハ安よく
ひ。サアあるあり酒どや。なんぞあるひものでありうみよまるく
ひ絃よせふ。ナントお茶あれでいっ杯ん。アイ大きなもの
じやあ。ふべふべあんどよいものおくまう。すく母ろく
きアや金百疋。すくとがく〳〵
歌を鼎
常〳〵素の湯ようとた人素去よ汐とそ山乃を好者
ふ人と日乃まて汐キくりうえう素ようこけまべ三人
烈者の中へ挾まよざうあぐりもあるう人のまるぞく湯

つゞ気をくゞり乖〳〵ふる。鼻のわくりをなでるとて。鼻毛の
のびるよ心わ〳〵く。右のゑをよてチヨイと引めさそゝ南く右
の猴よ。歯んとをきべ下。坐の右足ゆて。まえより海ぬ教
よて。左のひぢよて。ゑ〳〵也じきるよおとろさ。左のゑへつ
ま〳〵。又左の脇へ又とつとおうんとをるを上容足て。是も右の
ひぢよて。ゑ〳〵もれど。今なんやをべきゑ〳〵もなく。えの完へ
そのと入を〳〵

物忘

ヲギヤア〳〵〳〵。それ。ちゑのと。鮮後の示ゑ〳〵せとをら

きゝふ。彼。仍て。只今。迷惑人。なよも。財外。お安。出去。ぬき
を。はしさ。出。都〳〵。せヤ。ゑを。と。以。姑。ハよ。ろこびをるものも。れ
あど。弟を。ゑ〳〵く。彼を。彼。よて。祇。過。ゆ。道。橋。のとぐ。
夢。れよ。ゑ。あの。芭。な。ゑ〳〵。ゑ。と。ゑ。ぶと。橋。の下を。足。ゑ。ぶ。わ。百
屋。祇。よ。ゑ。ぶ。食。を。咎。ゑ。居。ふ。を。足て。ハワア。いつゑを。足
て。も。出。ゑ。入。ゑ

高入道

瓢箪町。ゑふ。ゑ。八。の。天。職。の。女。帝。獣。鬼。病。ひ。て。ゑ。ん。
者。ゑ。大。よ。ゑ。ま。り。入。て。法。美。よ。名。る。足。医。の。数。を。寝。ど。も。

番頭あり。家内の内輝函家、西表氏を招くして、
伽羅で御療治と。病人を見せあれば、彼函者かしらを振って、
是ハ早くもうち立用く。只此まくを立て仕立てゆげの煙へ
を引ゆよい伽羅でおざるゝよ

梢の花

去る富家の娘二八二九の花まつびまご寄まる縁もなく、
恋くを窓に咲ちて武士のくゝ下でくるれる武士
隣家の乳母接ひて来り。此の娘に彼此あのあり
そでへ恋をおしあ。内で知りて恋りの娘に
ざる友の女で眼をあさんで居人と耳を寄ている人と口を
おさえている人と三人でおざりさ。亭主おしてよい人でおざり
ませぬ様でおざる様を見て人とハ恋くきの見遠
でおざりません。亭主ハ接ひもせねどうこ仏助さ

伯母も伯母

大坂近辺のゴリヤ去年今日ハ軍や宮下さも後ハ
大坂へ往て芝居見てあると淀百文毎まられて押やできま
そぐ乃妖婦へ来ひんぐんあまられる内ハ百文の淀を
伯母ハて流しりも情中ハ心ぢきいやりと彼も

雪間ひぐらし　ぬいろく　ぬ菜して　一せとあり　ぬ菜をあ
ぐりぴつ　梅の伯母の　百　仕てぴやめ　ぐるあり　ぜん　喰清
百文　傳　芝居を見て　丸　らんと　ぴつさんよりぴつ　梅　行　ぐち
さいると　おでさん　出　心　ぐ　冷飯　ぐ　あり　濃　百　して
おくそ　おでもうろ　安　イ　ぐ　ぴやめ　生　文　あ
順　會咄　赤立　冬の不絶

安永六酉年正月二日

横目木新

咄集清書會須　ちゅう　北町八百屋町　筆者八
心斎橋筋　橋芳町　壱丁東　茨木町
高橋栄治軒
淡川久藏
沸書物所